

# ブタとイノシシ

— 海南島黎族の生業からみた家畜と野生動物利用に関する一考察 —

Pigs and Boars — A Study on the Use of Domesticated and Wild Animals From the Standpoint of the Li Tribe of Hainan Island —

西谷 大

はじめに—問題の所在—

- ① 海南島におけるブタの出現
  - ② 中国的集約農耕と黎族のブタ飼養
  - ③ 海南島の焼畑と狩猟の歴史
  - ④ 黎族の生業からみた焼畑、狩猟、家畜の関係
- 結論にかえて—焼畑とブタ—

## [論文要旨]

日本列島において、ブタは大陸からもたらされた可能性が高い。しかしブタを農耕に取り込むといった特異な循環システムをもつ中国的集約農耕は、弥生時代およびそれ以降の日本の歴史においても、琉球列島を除いた日本列島には存在しなかった。またブタ自体も奈良時代以降は飼養しなくなるという歴史をもつ。本稿ではこの問題を、海南島のブタ飼養の歴史と、黎族のブタを重要視しない生業システムと比較しながら論じた。

海南島において、黎族がブタを日常的に飼養するのは明代に至ってからだと考えられる。その要因は海南島における大陸からの漢族移住による人口圧のためのブタ肉の需要拡大が背景にあり、黎族にとっては鉄製品や塩の交換品としてのブタの付加価値が、ブタ飼養を受容した要因だったと推測できる。

しかし黎族は、中国的集約農耕によるブタ飼養方法は受容しなかった。そのかわりに、水田、焼畑、狩猟採集、家畜といった生業を複合的に維持しつづけた。その特徴は、焼畑という自然界に作られた「大きな罌」を利用し、野生動物を日常的に狩猟するシステムを農耕内部に作り上げたことにあった。これが人為的な循環システムに頼る中国的集約農耕とは大きく異なる点であり、またブタをそれほど重視しない生業を維持することが可能な要因だったと考えられる。

琉球列島を除く日本列島の農耕は、海南島の黎族と同様に中国的集約農耕へと向かわなかっただけでなく、大陸の中国的集約農耕が卓越する地域ではすでに消滅した焼畑を、戦後の1970年代までおこないつづけた。日本列島における焼畑がどこまで遡るかは今後の研究課題であるが、日本のブタ飼養の問題をとりあげる場合、焼畑が有する野生動物の多様な利用に注目する必要がある。

## はじめに—問題の所在—

弥生時代の日本列島に、ブタが大陸からもたらされたという説がある。弥生時代のブタの存在を主張する西本豊弘は、日本列島にブタが出現するのは、弥生時代早期（約前300～200年）～中期末（紀元前後）ごろと推定する〔西本1993〕<sup>(1)</sup>。さらに「西日本の弥生時代の遺跡から出土するイノシシ類の大部分はブタである」と述べ、古墳時代においてもブタは引き続き飼育されていたと主張している〔西本・松井編1999〕。そして日本列島出土のブタの形質の特徴が、中国のブタと類似することから、弥生時代に大陸からもたらされたと考えている〔西本1990〕<sup>(2)</sup>。

ところが日本列島においては、奈良時代以降になるとブタの存在は希薄になり、平安時代以降にブタを飼っていたという証拠はなくなる。ブタ飼養が再び列島に登場するのは、江戸時代に入ってからだといわれている〔塚本1991, 佐原1996〕。

ではなぜ日本列島では、ブタを飼育しなくなるのか。西本豊弘は「奈良時代以降、肉食禁止令や殺生禁止令が何度も出されるようになり、古代のブタが野生に戻されたりして、日本の歴史の上からブタは消え去る」とする〔西本・松井編1999〕。甲元眞之は、日本列島が稲作栽培を受け入れることで、家畜飼育を重視しない選別的な経済類型が展開したと主張する〔甲元1992〕。安部みき子は、弥生時代に野生のイノシシと形質の特徴が異なる種類が存在した点は認めつつも、弥生人がイノシシを家畜化したのではなく、渡来人が大陸からもちこんだとする。しかしブタ飼育をおこなうには冬期の飼料や大量のブタを飼養するための飼育場所の確保だけでなく、伝染病のためのリスクの回避を考えなくてはならないと推論する。そして定住農耕による集落周辺の環境変化の始まりは、集落の近くにイノシシが住む環境を出現させ狩猟を容易にすると推論する。こういった環境で、弥生人が積極的にブタを飼育する必要性はないと、弥生時代のブタ飼養について否定的な立場をとっている〔安部1996〕。

筆者は中国と日本列島における農耕のシステムそのものの方向性に、違いがあったのではないかという問題提起をおこなった〔西谷2000a・b, 2001a〕。中国の農耕システムの特徴は、中国的集約農耕にある。中国的集約農耕とは、黄河中下流域、長江デルタや、それに珠江デルタなどの人口集中地域で発達した農耕のことである。この農耕は、家畜を徹底的に人の管理下におくという特徴をもつ。例えばブタは便所の下に豚舎を施設し、そこに閉じこめて人糞、残飯などで飼養しつつ、ブタの糞を耕作地の肥料として使うといった、農耕内部に特異な循環システムを備えるという特質をもっていた。つまり人口集中地域で、家畜を徹底的に管理し農耕内に組み込むことで家畜の飼養を可能にする方法である。

日本列島において、ブタは大陸からもたらされた可能性が高い。しかし弥生時代以降の日本列島における農耕システムは、琉球列島を除いてブタを農耕内部に取り込み利用するタイプではない。中国的集約農耕が当時の日本列島に伝播したかは別にして、ブタが放棄されたのは農耕における家畜利用の方向性が根本的に異なっていた可能性が高いと推論した。

本稿ではさらに一歩進めて、中国的集約農耕と異なりブタという家畜そのものを重要視しない生業システムとは、どのような特徴を持つ可能性があるかを論じたい。この問題を考える上で、海南

島の動物利用の姿と比較対照する方法をとる。その理由は海南島に居住する黎族が、家畜としてのブタをそれほど重要視しない生業システムを有していたからである。そのため黎族の生業を明らかにすることは、ブタという家畜を重視しない生業システムを具体的に知る手がかりになると考えられるからである。

## ①……………海南島におけるブタの出現

<sup>(3)</sup>海南島が文献上に登場する最も古い記録は『礼記』王制で、そこに「雕題」とあり、体に文身を施す人々が住む土地と記されている。『山海経』海内南経、大荒北経には「儋耳」「離耳」とか、「穿胸国」「貫胸国」と記されている。「儋耳」「離耳」は耳たぶに耳環を入れるため、耳が肩までたれる風習をもつ人々が住む場所という記述である。「穿胸国」「貫胸国」は、貫頭衣を着ている人々が住む国という、民族の風俗習慣がそのまま固有の名称になっている。海南島は漢代以降になると、「駱越」「蛮」「蛮夷」「俚」「僚」「俚僚」などと呼ばれる。

漢の武帝は、前111年に番禺（現在の広州）を中心としていた南越国を滅ぼす〔『漢書』地理誌〕。武帝は海南島に儋耳、朱崖の二郡を設置し、漢代以降の海南島は歴代中国王朝から、大陸南部の周辺地域として位置づけられる。そして独自の国家を形成することはなく、歴代王朝の政治・経済的影響を直接的間接的に受けつづけてゆくことになる。

海南島における、漢代の生業の実態を窺わせる記録は少ない。『漢書』地理誌下には、「稻や紵麻を植え、女子は蚕桑緝績する。馬・虎は無く五畜がある。山には鹿が多い。兵には矛・楯・刀・木弓・弩を、竹矢或は骨鏃を用いる」とある。<sup>(4)</sup>五畜とはすなわち五種の家畜であり、ニワトリ、ヒツジ、ウシ、ウマ、ブタをさす。『漢書』の記載を信じるならば漢代の海南島では、ブタはすでに存在したことになる。

ほぼ同時期の倭国の生業を記載したものに、『三国志』魏書東夷伝がある。「人々は稻・麻を植え、桑・蚕で紡績し、布・絹・真綿などを産出する。その他に、牛・馬・虎・豹・羊・鵠はいない。兵器には、矛・楯・木弓を用い。木弓は、下を短く、上を長くし、竹の弓には、鉄鏃や骨鏃を用いる。要するに産物や風俗などを比べると、儋耳や朱崖と同じである」とある。<sup>(5)</sup>

非常に有名な記載であるが、海南島がこれまで日本列島の古代史と関連づけられてとりあげられるのは、倭国の産物や風俗が海南島の「儋耳や朱崖と同じである」という唯一この一文のみといっても過言ではなからう。

しかしこの二つの文献史料が示す儋耳・朱崖と倭国の生業には、大きな差がある。海南島の儋耳と朱崖にあって、倭国にないものは稻と五畜の記載である。漢代の海南島において、ブタやコメの存在は考古学的にはまだ確認されていない。一方弥生時代の日本列島は、文献には登場しないがブタが存在した可能性が高いし、また稲作を基盤とした農耕社会だったことは周知の事実である。

漢代の海南島の生業に関する記事は非常に断片的であるが、唐代に至ってもその状況は変わることはない。『瓊州府志』巻二には、「海南の気候は暖かく1年に作物（種類は不明）が3度実る」とある。<sup>(6,7)</sup>また李徳裕が「五月畚田収火米」と「五月は焼畑から米を収穫する」〔『全唐詩』巻四七五「李徳裕」〕と詠んだように、水田のほかに焼畑が存在したことがわかる。<sup>(8)</sup>このように、唐代の少な

い記録からは、海南島には水田と焼畑の両方が併存していたことは明らかなのだが、ブタが飼養された記録はみあたらない。

時代が下り宋代になると文献史料が格段に増え、生業についての具体的な姿をある程度は把握できるようになる。黎族の「黎」という用語も宋代以降に使われ始める。中国からみて当時の黎族は、「生黎」と「熟黎」の二つに分類されていた。「熟」は政治的に中央政府に服した意味であり、「生」はそれに反して反抗的な黎族という意味である。宋代以降の文献には焼畑をおこなう黎族の記載が登場するが、「黎」は焼畑をおこなう「山の地」という意味の黎語の発音を、宋代の古漢語に移しかえた名称だといわれている [黎族簡史編写組1982]。

宋代の海南島は漢族の移住が進み、沿岸部の朱崖や儋耳などの町やその周辺では、漢族や漢化された熟黎が居住する一方で、生黎は内陸の山間部に住むという、それ以降の海南島の特徴である居住の二極化が進んだ時代でもあった。また沿岸部の漢化が進む熟黎のあいだでは、占城米を植えることによって二期作の水稲栽培がかなり定着するようになる。<sup>(9)</sup> 占城米は、インドシナ半島のチャンパー（占城）のコメである。インディカ系の早稲で、干害ややせ地に強く塩分を含む田でも育つので、この品種の普及によって中国南部から海南島での稲作生産量が安定したといわれている。朱崖周辺では、生、熟黎ともにコメを植えていた記録があるとともに [『続資治通鑑長編』<sup>(10)</sup>、すでに灌漑設備をもった水田も出現している [『広東考古輯要』<sup>(11)</sup>]

超汝适の『諸蕃志』は、海南島について「祭祀には牛、犬、鶏を使う」と述べている<sup>(12)</sup>。また「耕牛」という、つまり水牛をつかった踏耕の記録もあるので [『斜川集』、家畜として水牛、イヌ、ニワトリを飼養していたことは疑いなかろう。

宋代において、ブタの存在が明らかな史料は蘇東坡の詩である。蘇東坡は、1097年に政変のため官職を剥奪され海南島の儋耳に流され3年にわたってこの地で暮らした。彼はこの期間に、およそ100編近い詩を残している。そのなかに、当時の儋耳周辺での生活や、黎族の生業をおりこんで詠まれた詩が数多くある。

蘇東坡が流された儋耳は、現在の儋州市より西北におよそ50km離れた中和鎮に位置する。町の北側に儋耳山があり、ここから東南の儋州市までは丘陵地帯が広がる。現在は丘陵上にパラゴムを一面に植林しているが、1950年代以前は森林に覆われており、水田は丘陵間の狭い低地に開墾され、その面積は狭くむしろ畑作が卓越していた地域だった。

蘇東坡の「聞子由瘦」という詩の一節に「五日一たび見る花猪の肉、十日一たび遇ふ黄雞の粥。黎族は頓頓として藷芋を食ひ、くすべた鼠だの炙った蝙蝠だのを食って居るに過ぎぬ。鼠の子の蜜漬の話聞いて嘔吐を催したが、近ごろようやく蝦蟇が食えるようになったのも、土地の習俗にかぶれたためであろう」 [第5巻 P818]<sup>(13)</sup> とある。そしてこの詩に自身で、「儋耳は至って肉食を得難し」という註を書き残している<sup>(14)</sup>。

この詩にでてくる花猪とは、去勢をしていないブタのことである [李時珍『本草綱目』<sup>(15)</sup>]。中国的集約農耕は、ブタを集落内のしかも便所で飼養する。そのため発情時期の喧噪と雑種の繁殖を管理する必要があり、必ず去勢をおこなう。蘇東坡のこの一節から、おそらく漢族が移住した沿岸部の儋耳などの町やその周辺では、ブタはある程度は飼養されていたことがわかる。しかしそのブタは去勢を施されていない花猪であった。つまり大陸の中国的集約農耕が普及した地域では必ずおこな

われていたブタの去勢が、宋代の海南島の儋耳周辺では普及していない事実は、中国的集約農耕の農耕システムもまた、この地に普及していなかったと推測できよう。

その一方で黎族が野生動物の狩猟をおこない、ネズミやコウモリなどの小動物を食べていた実態は窺えるのだが、内陸の山間部に居住する「生黎」におけるブタ飼養の有無は、宋代の文献上だけではよくわからない。

さて黎族において、ブタの飼養が確実に確認できるのは、時代が下った明代からである。顧炎武の『天下郡国利病書』「広東下」に「下養羊豕之類」とあり、黎族特有の高床式家屋の床下で、ブタ、ヒツジがそのほかの家畜と一緒に放し飼いによって飼養されている様子が述べられている。村内でブタを放し飼いにする飼養方法は、現在の黎族の村でもおこなわれている。

さらに時代が下った、張慶長の『黎岐記聞』にも生黎に関する記載にブタが登場する。そこには「ことあれば、牛、犬、鶏、豚などの家畜を用いる。料理の方法を知らず、矢で射殺し、毛を取り去らず、薪の火であぶり、刀でもって割いて食べる」と述べられている<sup>(16)</sup>。

『漢書』にみえる五畜という表現を除くと、海南島における文献上にみられるブタの記載は、宋代に至ってからである。しかし宋代のブタ飼養の実態は、漢化された沿岸部の儋耳周辺のごく一部の地域に限定されていた可能性が高い。黎族が本格的にブタを飼養するのは、明代に至ってからだと考えられる。

## ②……………中国的集約農耕と黎族のブタ飼養

黎族が明代になるとなぜブタを飼養するようになるかという、その契機を明らかにするため、最初に中国的集約農耕におけるブタ飼養の目的と要因を述べておく。

中国的集約農耕の自然利用とは、一言でいえば限られた種類の動植物を人間社会に深く取り込み、自然への積極的な介入と支配が貫徹した世界だといえる。

例えば長江デルタでおこなわれてきた中国的集約農耕である「湖羊」と、かつて珠江デルタで広く分布した「桑基魚塘」は、その循環システムに中国的集約農耕の特徴がよく表れている。長江デルタの循環システムとは、次のようなものである。桑の葉をヒツジの飼料として用い、その糞尿は水田、桑畑の肥料となる。また農業の副産物や厨房から出る人間の食べ残しなどによってブタを飼い、その糞尿はやはり肥料として水田や畑に施肥として利用する。さらにカイコの食べ残した桑はヒツジの餌になり、糸を吐いた後のサナギは、ブタやヒツジの糞とともに養魚池の魚の餌になる。そして最後に養魚池の泥も、桑地や畑、それに竹林の肥料にする。

一方広州デルタで発達した「桑基魚塘」の「基」とは魚塘（養魚池）の周囲の堤をさすが、土を凌いで養魚池を作り、その土で畑をこしらえる方法である。伝統的な「桑基魚塘」は、魚塘で養魚をおこないつつ、塘基で桑（もしくはサトウキビ）を栽培する。そしてその魚塘のそばに豚舎を設けブタ飼養をおこなう。また桑地には冬から春にかけて野菜を栽培する。この時期は水位が低いので斜面に野菜やトウモロコシを作ることができる。桑の葉でカイコを飼い、カイコのサナギ・カイコの糞・ブタの糞尿・野菜の茎葉・トウモロコシの粉末等で養魚をおこなう。そして魚塘の底の泥糞を、桑・サトウキビ・野菜の肥料にするという循環システムである。この両地域の農業システム

は、宋代には完成されたといわれている [郭他1989]。

これまで長江デルタや珠江デルタでの中国的集約農耕は、畜糞・施肥を媒体として、農業・牧畜・養魚が有機的に結合した、中国的な伝統農耕の延長線上に必然的に成立しうる合理的な循環システムとして理解されてきた [郭他1989]。しかし菅豊が湖羊を調査し述べたように、このシステムは「農業・養蚕・牧畜・養魚の生態システム」でありつつ、長江デルタの高い人口圧力がその主要な成立要因になっている。そして労働力不足と耕作不足から必然的におこなわれた、限られた資源の循環的な利用を含む多角的農業経営である。いわば非自然的な「人工的自然循環システム」と理解される [篠原2002a, 菅1998, 2002]。つまり中国的集約農耕は、その成立背景に人口圧のなかで限られた資源を循環的に利用することで生産性をあげ、人口支持力を高める生業システムとしてとらえることができる [西谷2001a]。

では明代の黎族におけるブタ飼養の出現も、やはり中国的集約農耕と同様の成立要因を考えていいのだろうか。

海南島における明代の人口は、元代よりも40%増加しおよそ22万人に達したという [呉1997]。つまり明代にいたって元代よりはるかに人口圧が高まったことは、食料もそれだけ増産する必要があったことを示している。さらに明代の海南島の全人口のうち、およそ1万6千人は、屯田兵だったといわれている [『平黎碑記』]。元代が海南島の黎族を中心とした屯田兵を構成していたのに対して、明の屯田兵はすべて華北から派遣された兵によって構成されていた。つまり全島の人口のうちおよそ8%にもおよぶ人々が、華北から派遣された屯田兵だったことになる。

中国的集約農耕のシステムは、中原の人口集中地域で発生したと考えられる [西谷2001a]。当時の中原の人々にとって、農耕にブタを組み込み、日常的にブタを食することは一般的な生活風景だったと考えられる。おそらく華北から来島した屯田兵の農耕も、中国的集約農耕を島に持ち込んだであろうし、また日常的なブタ肉の需要は海南島のそれ以前の時代と比較すると格段に高くなったと考えられる。

このことは、漢族と黎族との交易品の歴史的变化によっても裏づけられる。宋代における海南島の特産品は、『諸蕃志』によれば、沈香などの香木、ビンロウ、ヤシ、カラムシ、籐、吉貝などである。黎族は、交易品によって鉄製品や塩を交換していたことが記されている<sup>(19)</sup>。また『嶺外代答』香門には、黎族とは牛（おそらく水牛）で、香木と交換すると述べられている<sup>(20)</sup>。このように宋代には、交換品としてのブタは登場しない。

スチューベルや岡田謙、尾高邦雄がおこなった1930年代の調査によると、黎族が欲した品物は、鉄製品、塩などであった [スチューベル1943, 岡田・尾高1942]。ところが尾高邦雄によれば、代価として黎族から漢人の商品に支払われる交易品として「芣、芋、豆、牛、豚、鶏、鹿皮、鹿鞭、猿、梟、龜、蜂蜜、木材薬草」をあげ、そのなかにブタも入っている。

これらのことから、おそらく黎族におけるブタ飼養開始の要因は、海南島における屯田兵などによるブタ飼養の普及の影響と、海南島における人口増加とそれともなう食肉需要の高まりが背景にあったのではないかと推測できる。そして黎族が漢族と交易をおこなうさいに、ブタも交換品の一つとして価値をもつようになった変化が、明代に至って黎族がブタ飼養を一般化させていった要因の一つだったのではないかと推測される。

### ③……………海南島の焼畑と狩猟の歴史

黎族のブタ飼養開始の契機は、中国的集約農耕のシステムそのものを受容した結果とは考えにくい。黎族が中国的集約農耕を受容せざるえなくなるのは、1980年代に入ってからである [西谷2001c]。

中国的集約農耕は、大陸の中原、長江デルタ、それに珠江デルタでも発達した。しかも海南島の対岸に位置する珠江デルタ地域で中国的集約農耕が受容されるのは、戦国末期から漢代にかけてと古い。珠江デルタにおける中国的集約農耕の発生の契機を述べつつ、海南島の黎族が1980年代まで中国的集約農耕を受容しなかった要因について考えたい。

珠江デルタの中国的集約農耕の証拠として、ブタ便所の明器があげられる。ブタ便所は、便所の下に豚舎を併設した施設である。広州を中心とした漢墓からは、このブタ便所を模した明器が数多く出土する。このことからこの地域は漢代に、ブタ便所＝中国的集約農耕がすでに普及していたことがわかる [広州市文物管理委員会・広州市博物館1981, 西谷2001a]。広州漢墓では、前漢の中期以降から高床家屋の2階の1室を便所にし、その下の1階部分を豚舎にした、他地域には類例がない特異な構造もつブタ便所が出土するようになる。

珠江デルタにおける中国的集約農耕の出現要因は、戦国末期から前漢にかけて、漢という国家が膨張していく歴史と深く関わっていると考えられる。『史記』によると戦国時代の広東・広西省一帯は、越・蒼梧の国と称した。前214年に始皇帝がこの地域を50万の軍隊でもって、5年間制圧し、桂林・象郡・南海などの諸郡を設置した。そのさい50万の軍隊も、この地にそのまま残留したといわれている。秦滅亡後は、中国全土が争乱状態に陥った。前207年、混乱に乗じて南海郡尉の趙佗が桂林・象郡を攻撃し、武王と称して越人の国である南越国を興し番禺（広州）を都とした。

漢もその前半期には南越国の分権的統治を認めたが、武帝の時代になると大軍を派遣して第5代の王である建徳や呂嘉らを殺し、南越国は5代97年で滅びた（前111年）。そして武帝は中国の南部地域とベトナム北部に交趾九郡を置き、ハノイ付近の地を交趾部の治所に定めた。

この歴史的事実を参考にすると、戦国末期から漢代にかけて、珠江デルタでは華北からの人口流入があったことがわかる。秦始皇帝の軍事行動にともなって大量の軍隊が残留したことと、武帝の南越国制圧によって、漢族が番禺（広州）を中心として居住し始めたことである。広州地域における中国的集約農耕の開始は、地元の在地社会が希求したものではなく、むしろこうした移住者にもなっておこなわれたのであり、おそらく都市とその周辺での爆発的な人口増と、それをおぎなう食料供給のためにブタ便所＝中国的集約農耕が必要とされたと考えられる。

このように漢代にすでに中国的集約農耕に変容した珠江デルタを控え、しかも宋代以降は、沿岸部から漢族の移住による漢化が進むなかで、黎族のブタの受容が進んだと推測される。

蘇東坡の詩から、宋代の僑耳周の生業に関わる記述を抜き出してみたい<sup>(13)</sup>。蘇東坡は、黎族の人々の家を探ね歩き酒を飲む詩で、「占禾を煮得たり、半ば是れ藷（米を煮ているというが、その半分は藷を交ぜたもの）」[第6巻 P68]と詠っている。彼の詩には、薯を食べたと詠った箇所が多い。列挙してみると、「紅藷紫芋」[第5巻 P808]、「藷芋雜米を以て粥糜を作り、以て飽を取る」[第5巻 P810]、「平郊は土質極めて肥沃である。……然る黎人はここを耕そうとはせず、朝に鹿を追射り、

夜に猪を逐い、芋の羹に長芋の粥を以て長老輩を飽かしめて居る」[第5巻 P812],「山の芋で玉糝羹というどろどろのものを作った」[第5巻 P827],「芋がしらを飽食して足れりとすべくんば肉がなくても決して心配するにはおよばない」[第6巻 P36],「黄薑,土芋を収め(里芋は薑芽とともに収蔵し)」[第6巻 P86]とある。

蘇東坡の詩には、黎族が焼畑をおこなっていたという直接的な表現はみあたらない。しかし、僑耳周辺の黎族は、おそらく水田耕作をおこないつつも、焼畑によるイモ(おそらく、サツマイモ、ヤムイモ、タロイモ)などの自給作物も重要な食料源だったのではなかろうか。

蘇東坡の息子の蘇過が詠った「夜猎行」という詩では、まず冒頭で「海南島は鹿と猪が多い。土地の人々は月夜に狩りをおこなう。その方法は獲物が寝ているところを囲んで狩るため、逃げ出す獣は皆無である。町の南側は山林で、夜になると狩りをする声が聞こえ、朝になると狩猟に参加した誰かが肉を分けに来てくれる」と述べている。<sup>(21)</sup>そして詩の一部で「今年の収穫は悪く、竹林の間に広がる田には稲はなく、田を耕す牛も殺され食べられている。だからこそ野生の動物たちが、人に狩られ命を失うのも仕方がない」と詠っている。蘇過の詩からは、僑耳周辺の黎族の生業は、コメも作るが(水田か焼畑かはわからない)、それは不安定であり、イモだけでなく動物性タンパク質の一部は狩猟に頼っていたことが推測できる。

明代以降の黎族はブタを飼養するが、ブタ便所は存在せず村内での放し飼いという方法だった。またブタ肉を日常的に食べる習慣はほとんどなかったことも、特徴としてあげられよう[スチューベル1943,岡田・尾高1942,中南民族学院本書編輯組1992]。つまりブタは飼養するのだが、中国的集約農耕とはまったく異なった家畜飼養の形態だったといえよう。

明代になると焼畑と狩猟の詳細な記述が、残されるようになる。顧峴の『海槎余録』に「僑耳の境では、山の面積は田の百倍にもおよび、山は土が多く石が少なく、頂上付近まで耕作することができる。黎族は4月の晴れた日を選び、山の木を切り集め57日おいてから焼く。そのとき上から下へと焼いていく。大きな木も小さな木も焼いて灰にし、根も残さないようにし土の中まで焼く。そして鋤で耕し綿や山の稲を植える。山の稲は、実が大きく香りがよい。3,4回連続して耕作すると土地が痩せるので、放棄して別の場所を探し同じ方法で焼畑をおこなう」とある。

この焼畑の耕作は、ごく最近まで黎族がおこなっていたのと同様の方法である。また狩猟についても、同じく顧峴の『海槎余録』に記載がある。その特徴は、村単位でときには千人単位で山一つを囲み、猟犬の数が数百匹にもほり、猟銃の数も数百におよぶなど大規模な囲み猟をおこなっていることと、狩猟した肉は村内で平等に分配されることにある。

焼畑と狩猟採集を主としておこない、水田をもたない黎族の集団は、おそらく19世紀までは存在していた。光緒(1875~1908)時代の『安定県誌』「輿地・物産」には、山で焼畑をおこない陸稲を植え生活する黎族の記録がある。

このように宋以降の黎族の食料獲得の歴史において、狩猟と焼畑が重要な役割をはたしていたと推測される。しかし文献だけでは、焼畑、狩猟、家畜といった生業が、相互にどのような関連があるのか明らかではない。黎族は、ごく最近まで水田、焼畑、家畜、狩猟採集を複合的におこなう生業を維持しつづけた。そこで次に、現在の黎族の複合的生業について具体的に述べ、ブタを重視しなかった生業システムについて考察してみたい。

#### ④……………黎族の生業からみた焼畑，狩猟，家畜の関係

海南省五指山市の五指山郷と毛陽鎮の間には、昌化江支流が流れ、それに沿って多くの村が展開する。ここでとりあげる黎族の初保村は毛陽鎮からおよそ10キロメートル東に進み、さらに南から流れ込むナムハ川をおよそ2キロメートル南に遡ったところにある。周囲は、およそ標高1000mの山に囲まれた谷間の村で、村の標高はおよそ500mである。初保村は、五指山市毛陽鎮牙合行政村に属する自然村の一つであるが、この行政村は初保を含む什冲・方満・什好・便文の5つの村から構成されている。初保村の戸数は現在50戸で、人口246人を数える<sup>(22)</sup> [西谷2001c]。

初保村には、水牛、黄牛、ブタ、ニワトリなどの家畜がいる。しかしニワトリ以外の家畜は、結婚式、葬式など特別な日にしか食べることはない。それに対して動物性タンパク質は、イノシシなどの大型の野生動物だけでなく、ネズミなどの小動物や、昆虫類、爬虫類などを日常的に食してきた。

それを支えてきたのが、焼畑の存在である。村の前面には、ナムハ川が流れる。谷筋の一番低いところと、水が容易に利用できる山の緩斜面には棚田が広がり、ここが水田ゾーンを形成する。山の頂上近いゾーンは、焼いて草地にするか自然林をそのまま残した灌木ゾーンが広がる。水田ゾーンとこの草地・灌木ゾーンに挟まれた山の斜面が、焼畑をおこなっていたゾーンだった。焼畑はこのゾーン内を循環させていく。

初保村の焼畑は、およそ5年ほど連作した後最低5年間は放棄し休耕する方法だった。そうすることで地力を回復するのを待つ。村では、1年目のアン（焼畑）をアンバンといい、連続して使用しているアンをアントゥという。そして耕作をおこなわなくなり休耕したアンをラウアンという。このラウアンが次の焼畑のための休耕地の役目をはたす。

焼畑は移動する。放棄されたラウアンは、イノシシやキョンなどの大型動物にとっての格好のすみかを提供し、焼畑はこれら大型動物にとっての餌場を提供してきた。焼畑は、ほぼ一年間にわたって、イノシシの好物であるマメ類、イモ類や、それに陸稲を生産しつづける。イノシシにとっては理想的な餌場だったわけである。焼畑は野生動物をおびきよせる役目をはたしており、いわば自然界に作られた罠と同じである。これを焼畑の「大きな罠」機能とよんだ [西谷2002, 2003a]。

草地ゾーンは、村人が3～4月にかけて山焼きをおこなうことによって形成される。このゾーンは、野生動物狩猟の場となる。イノシシの狩猟は、単独でおこなう方法と集団でおこなう方法がある。単独の場合は、夜、山を歩き回りイノシシが出没すキャッサバを植えた畑に待ち伏せし猟銃で撃ち取る。一方集団でおこなう囲み猟は、草地ゾーンでおこなった。山焼きは、村全体で一斉におこなうことはない。草地を少しずつ焼いていくため、自然とイノシシやキョンなどの野生動物は、まだ山焼きがおこなわれていない草地に逃げ込む。そこを取り囲み、狩猟の得意なリーダーのもと、イノシシやキョンが通る獣道に待ち伏せし猟銃で撃ち取る。

小動物狩猟もまた、黎族にとって動物性タンパク質確保の上で重要な生業の一つである。なかでも特にネズミ罠は盛んにおこなわれており、12月から3月にかけての冬場のネズミ肉は、村人にとって貴重な動物性タンパク質になる [西谷2002, 2003a]。

ネズミは、冬場になると山の谷筋の小川沿いに穴をほって巣にしそこで棲息する。日が沈むと活動を開始し、焼畑に進入して作物を餌にする。ネズミ罠は、一回につき40～50個のトラバサミ罠をアンの周囲や焼畑内部に朝早く設置する。ネズミは体の側面を壁にこすりつけながら移動する性質がある。そのため岩陰、倒木、アン周囲に作られた石垣などにネズミが通りなれたネズミ道ができる。トラバサミ罠は、こういった周囲から焼畑への進入路に設置する。

一世帯につき、ネズミ罠を春節前後から10数回にわたって設置し、一回につきそれぞれおよそ50数個前後の罠を仕掛ける。大体1回につき20匹～30匹の収穫があり、冬場の1～2ヶ月だけでも300～400匹のネズミを捕獲することが可能である。初保村の各世帯は、冬季には必ずネズミ罠をおこなう。初保村の50の各世帯が、少なく見積もって一冬に300匹のネズミを捕獲したとすると、およそ15000匹ものネズミを捕獲することになる。300～400匹というネズミ数は、5人家族がほぼ2ヶ月間にわたって、動物性タンパク質としての肉を昼と夜の食事に毎回食べられる量である。そして食べきれない肉は乾肉にして保存することが可能である。

ネズミ罠は、第一に作物をネズミの被害から守るという害獣駆除の意味が大きいが捕獲したネズミは、立派な食料になる。ネズミ一匹の肉量は少ない。しかし日常的にしかも大量に捕獲できるという点が、食料として重要な地位をしめている理由である。

焼畑におびき寄せられる小動物は、ネズミだけではない。例えば焼畑に植えられる陸稲は、トリの格好の餌になる〔西谷2003c〕。そのため10月末から11月初旬の収穫期になると村人では、各世帯の誰かが鳥追いのために焼畑に見張りにたつ。トリを追うには、パチンコか弾弓を使う。パチンコはゴムで石などの弾を飛ばすもので、弾弓は黎族固有の弾を飛ばす道具である。弓の形をしているが矢を放つのではなく、弦の中心部分に、小石を飛ばす小さな籠を装着している。トリの群れが飛来すると、このパチンコや弾弓で石を群れにむかって放ちおどかし、ときにはトリを撃ち殺す。

焼畑で捕獲したトリは、食料としても利用する。食料としてきた動物はこのほかにも、小動物ではハクビシン、センザンコウ、テナガザル、キツネ、ヤマアラシ、リスがあり、鳥類ではスズメ、カラス、コウモリ、フクロウ、ツバメ、野鶏などがある。爬虫類では、ヘビ、トカゲ、ヤモリ、それに昆虫類では、クモ、ケムシ、アリの卵が食べられてきたし、水田で棲息するカニ、カエルだけでなくオタマジャクシまでも食料にしてきた。もちろん村の前面を流れるナムハ川でとれる魚類も日常的な副食の一つだった。

このようにイノシシなどの大型野生動物や、ネズミ罠やトリ罠などをはじめとする小動物狩などの罠を支えてきたのが、野生動物をおびき寄せる餌場としての焼畑とその周辺の空間である。焼畑と動物狩とは密接な関係にあり、作物を供給する畑としての役割だけでなく、自然界に作られた「大きな罠」として野生動物をおびき寄せ、そこで捕獲するという2つの役目を農耕のなかに内在化してきたといえるだろう。そしてこの焼畑とその周辺での多様な野生動物利用の存在が、ブタという家畜をそれほど重視しない生業システムを可能にしてきた要因だったといえる。

## 結論にかえて—焼畑とブタ—

海南島におけるブタの出現は、『漢書』の記載を信用すれば漢代ということになる。しかしそれ以降の宋代に至るまで、文献上ではブタを積極的に飼養していた姿は浮かび上がってこない。また宋代の僑耳周辺でのブタ飼養形態は、当時大陸では一般的であった中国的集約農耕によるブタ飼養とは異なっていた可能性が高い。またブタ飼養そのものの存在も、漢化されつつあった沿岸部の僑耳や朱崖といった、ごく一部の地域に限定されていたと思われる。

海南島の山間部に居住する黎族が、ブタを日常的に飼養するのは明代に至ってからだと考えられる。その要因は大陸の華北からやってきた大量の屯田兵だったと推測した。屯田兵が持ちこんだブタ飼養の普及と、人口圧によるブタ肉の需要拡大が背景にあり、黎族にとっては鉄製品や塩の交換品としてのブタの付加価値が、ブタ飼養を彼らの間でも広げていった要因だったと考えられる。

しかし黎族は、ブタを日常的な食料とする習慣をついに解放後までもたなかったし、中国的集約農耕も受容しなかった。そのかわりに、山間部の黎族は、水田、焼畑、狩猟採集、家畜といった複合的な生業を維持しつづけた。その特徴は、焼畑とその周辺の自然界とのあいまいな空間の利用にあった。焼畑とその周辺でおこなわれてきた動物狩猟は、動物性タンパク質確保と農作物の被害を最低限に押さえる二つの側面をもち、それが彼らの生業システムに組み込まれてきたといえる。つまり焼畑は自然界に作られた「大きな罠」という機能をもち、イノシシなどの大型野生動物や、日常的には小動物狩猟といった狩猟場を農耕内部に形成する役目をはたしてきた。黎族の自然利用は、野生動物を多様に利用することに特徴があり、中国的集約農耕の特徴である人為的な循環システムを有する農耕とは大きく異なる形態だったといえる。そのためブタという家畜を、それほど重視しない生業システムを作り上げ維持することが可能だったと考えられる。

日本列島は、海南島と同様に中国的集約農耕が発展しなかった地域である。日本列島における水田稲作の一つの特徴は、他生業を水田に内部化したことだという説がある。生態的に魚と稲作の結びつきはごく自然であり、日本列島の水田稲作は漁撈を内部化していったというのである [八幡1980, 根木・湯浅・土肥1992]。安室知は民俗資料をもとに検討し、歴史的史料を用いた遡及には限界があるとしつつも、稲作による他生業の内部化が水田稲作が開始された当初からおこなわれていたと主張している [安室1998]。

琉球諸島を除く日本列島の農耕は、中国的集約農耕がもつブタを積極的に農耕に取り入れるシステムではなかったが、その一方で、日本列島では実に1970年代まで焼畑が存続していた。1936年の記録によると、7万7000ヘクタールもの焼畑がおこなわれていたという [農林省山林局編1936, 福井1983]。

これまで日本における焼畑研究は、水田稲作に先行する古いタイプの農耕形態という側面や、照葉樹林文化の要素の一つとして注目されてきた [佐々木1970, 1972]。しかし焼畑の重要性はそれだけでなく、焼畑とその周辺で繰り広げられてきた多様な自然利用による食料獲得と、それに依拠する生業システムそのものに注意をはらうべきだと考えられる。

焼畑をめぐる自然利用の多様性と生業システムは、海南島黎族の一事象としてだけでなく、焼畑

をおこなう農耕であるならば、普遍性をもつ可能性が高いと考えられる。そして日本列島におけるブタの受容と放棄という歴史とその要因を探ろうとするならば、おそらく焼畑をめぐる生業システムを視野に入れて考える必要があろうと思われる。

日本列島の古代における焼畑の実態を明らかにすることは今後の課題であるが、焼畑をめぐる生業のシステムを明らかにすることは、列島の食料獲得の歴史をもう一步深く考えるいとぐちになると思われる。

## 註

- (1) — 大分市の下郡桑苗遺跡で弥生ブタを確認し、その後、佐賀県業畑遺跡、吉野ヶ里遺跡（神埼郡神埼町・三田川町）、奈良県唐古・鍵遺跡（磯城郡田原本町、旧称唐古遺跡）、大阪府亀井遺跡（八尾市・大阪市）・池上曾根遺跡（和泉市、旧称池上遺跡）でブタを確認している。特に愛知県朝日（西春日井郡清州町・新川町・春日町）では、約200年間で5000～6000頭の弥生豚を飼育し食べていたと推定している〔西本1991, 1992a・b〕。
- (2) — 弥生時代以降の豚に関する数少ない文献史料の一つに、『播磨国風土記』賀毛郡の条の「猪養野」地名伝説があり、猪を飼う場所を求め、授けられて猪を放し飼いたしたという記述がある。奈良時代にも豚を飼っていたという記事があり、『続日本記』巻一によると聖武天皇が七三二（天平四）年七月に詔して、畿内の百姓が私的に蓄っていた「猪冊（40）頭」を買いとって山野に放って生命を遂げさせたという。
- (3) — 海南島は、北緯18° 10′ ～20° 10′，東経108° 37′ ～110° 03′ にあり、中国南端に位置する。島の中央から南東と北西に向かって五指山、黎母嶺などの平均標高1500メートル前後の山脈が走る。北部は丘陵と台地が海岸平野に続くが、南部は急傾斜となっている。海南島は熱帯モンスーン地帯に属しており、植生は熱帯から亜熱帯の様相を帯びる。面積は約34000平方キロメートルと日本の九州とほぼ同じ大きさであり、人口はおおよそ700万人である。主要なエスニック・グループは、漢族、黎族、苗族である。黎族は山間部を中心に、約100万人いるといわれている。海南島は現在一島で海南省となっており、省都は島の北側にある海口市である。海南島には、南側に三亜市という第2の港湾都市がある。
- (4) — 中華書局。『漢書』地理志下。原文、「男子耕農，種禾稻麻，女子桑蚕織績。亡馬與虎，民有五畜，山多麋麋。兵則矛，盾，刀，木弓弩，竹矢，或骨為鏃」。
- (5) — 現代語訳は、平野邦雄による『魏志倭人伝の現代語訳と解説』『吉野ヶ里遺跡展図録』朝日新聞社1989年からの転載。
- (6) — 本稿における『瓊州府志』、『統資治通鑑長編』、『広東考古輯要』、『宋史』、『地理誌六』、『元史』、『百官志八』、『海槎余録』、『天下郡国利病書』、『広東下』、『平黎碑記』、『黎岐記聞』、『安定県誌』、『斜川集』の引用箇所は、いずれも吳永章の『黎族史』からの引用である。
- (7) — 原文。「南方地氣暑熱，一歲三熟，冬種春熟，春種夏熟，秋種冬熟」。
- (8) — 李德裕，中唐の宰相。文才を認められ34歳で翰林学士となる。父と対立した李宗閔，その仲間の牛僧孺らの党と鋭く対立し，名高い牛李の党争の一方の旗頭となった。54歳で武宗即位（840）にあい，宰相に重用され，藩鎮を抑圧して中央権力の強化に努め，ウイグルなど外民族に対し積極的進出を図り，また廃仏を推進した。皇帝が宣宗にかわると節度使に出され，最後は反対党のため海南島に流され病死する。
- (9) — 『瓊州府志』與地志五，風俗。原文，「自宋播占城禾種，夏種秋收」。
- (10) — 『統資治通鑑長編』卷三一〇，「元豐三年（1080年）二月庚申」条。原文，「黎峒寬敞，極有可爲良田處」。
- (11) — 均見清『広東考古輯要』卷九。原文，「郷人築堤堰水溉田」。
- (12) — 『諸蕃志』卷下，志物，海南〔楊博文校釈，中華書局，1996。原文，「祭神以牛犬鷄彘，多至百姓」。
- (13) — 以下巻とページ数は，岩垂憲徳他訳註の『蘇東坡全詩集』からの引用箇所を表す。
- (14) — 中国では，古代から現在までブタ肉がもっともポピュラーな家畜として食されているイメージがあるが，宋代はブタが肉としての価値を極端に下げた時代だった。ブタ肉料理の定番である「東坡肉」を考案したとされる蘇東坡でさえ，「汴京の都に十年，肥えた小羊の肉を飽きる位に食って，・・・」と述べ僮耳では肉が手に入らないと嘆くのは，この肉のイメージを羊に求めているからであると考えられる。
- (15) — 遼寧民族出版社，1999年，援助朝編纂，『本草綱目』を参考。

- (16) — 原文、「遇有事，則用牛犬鷄豕等畜，亦不知烹法，取牲，用箭射死，不去毛，不剖腹，燎以山柴，就佩刀割食」。
- (17) — *Boehmeria nivea* (L.) Gaud. subsp. *nipponivea* (Koidz.) Kitam. イラクサ科の多年草。別名クサマオ。茎から繊維をとるために栽培される。
- (18) — 木綿でおった布。
- (19) — 原文、「無塩，鉄，魚，蝦，以沈香，縵布，木棉，麻皮等就省地博易，得錢無所用也」。
- (20) — 原文、「省民以牛博之于黎，一牛博香一担」。
- (21) — 原文、「今年歲惡不可度，竹間有米田無禾。耕牛日欲登鼎俎，野獸脫命理則那。朝來剥啄誰有鎖，愧尔父老勤弓戈」、『斜川集』卷二。
- (22) — 調査は、2001年8～9月、2002年3月～4月、9～10月にかけて初保村のA氏の家に住みこんで実施した。この調査は1999年から、学術振興会未来開拓学術研究推進事業「アジア地域の環境保全」(大塚プロジェクト)の一つである「地域社会に対する開発の影響とその緩和方策に関する研究—海南島班(リーダー篠原徹)」の一環である。調査地点は、海南島五指山市の4つの村(初保・保力・太平・水滴)であり、自然と人の関係についての調査が主な内容である(大塚2000, 篠原2001)(2003年3月終了)。

## 引用・参考文献

- 安部きみ子 1996「よみがえった弥生犬」『卑弥呼の動物ランド』平成8年春季特別展，大阪府立弥生文化博物館
- 尹 紹亭(白坂 蕃訳/林 紅翻訳協力) 2000『雲南の焼き畑—人類生態学的研究—』農林統計協会
- 岩垂 憲徳他訳註 1978『蘇東坡全詩集』日本図書センター
- 大塚柳太郎 2000「地域社会に対する開発の影響とその緩和方策に関する研究」『アジア・太平洋の環境・開発・文化No1』未来開拓大塚プロジェクト事務局，東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室
- 岡田 謙 1942『海南島黎族の社会組織』出版社不明(2001年，クレス出版復刻版)
- 尾高 邦雄 1942『海南島黎族の経済組織』出版社不明(2001年，クレス出版復刻版)
- 金子浩昌・牛沢百合子 1980「池上遺跡出土の動物遺存体」『池上・四ツ池遺跡』6，自然編大阪文化財センター
- 耕 隠 1986「我国家畜閹割技術発展」『中国畜牧史料集』科学出版社
- 広州市文物管理委员会・広州市博物館 1981『広州漢墓』文物出版社
- 甲元 眞之 1992「長江と黄河—中国初期農耕文化の比較研究—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集
- 吳 永章 1997『黎族史』広東人民出版社
- 佐々木高明 1970『熱帯の焼畑—その文化地理学的比較研究—』古今書院
- 1972『日本の焼畑—その地域的比較研究—』古今書院
- 佐原 眞 1996『食の考古学』東京大学出版会
- 篠原 徹 2001「生物多様性と連関する生計維持機構の多様性」『アジア・太平洋の環境・開発・文化No3—特集 海南島，変貌する村落社会と環境—』未来開拓大塚プロジェクト事務局，東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室
- 2002a『野生と栽培をつなぐ植物たち』『人間文化H&S』17号，神戸学院大学
- 2002b「実践としてのエスノ・サイエンス—論文解題—」寺嶋秀明・篠原徹編『エスノ・サイエンス』
- 菅 豊 1998「閉じこめられたヒツジたち—中国江南農耕社会のヒツジ飼育から見た商品経済の発展—」『東洋文化研究所紀要』135，東京大学東洋文化研究所
- 2002「創られたヒツジ—中国・江南農耕地帯の在来ヒツジの品種改良にみる家畜観」『エスノ・サイエンス』寺嶋秀明・篠原徹編，京都大学学術出版会
- H.スチューベル著，平野義太郎編・清水三男訳，1943『海南島民族誌—南支那民族研究への一寄與—』歙傍書房
- 中南民族学院本書編輯組 1992『海南黎族社会調査』广西民族出版
- 塚本 学 1991「生活をめぐる動物I—豚にも歴史があります」『歴史と地理』430，山川出版社
- 西谷 大 2000a「ブタとコメ」『倭人をとりまく世界—2000年前の多様な世界—』歴博フォーラム，国立歴史民俗博物館編，山川出版社，2000年
- 2000b「古代中国におけるブタ飼育の農耕内部化—江南と珠江デルタのブタ便所をてがかりに—」『自然観の人類学』松井健編，榕樹書林
- 2001a『豚便所—飼養形態からみた豚文化の特質—』『国立歴史民俗博物館研究報告』第90集
- 2001b「黎族と縄文人の美食家たち」『食は異なるもの味なもの—食から覗いた中国と日本—』(財)歴史民俗博物館振興会
- 2001c「山地住民の生業における山の垂直利用とその変化」『アジア・太平洋の環境・開発・文化 No3—特集 海南島，変貌する村落社会と環境—』未来開拓大塚プロジェクト事務局，東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室

- 
- 2001d 「家財道具調査」『アジア・太平洋の環境・開発・文化 No3-特集 海南島, 変貌する村落社会と環境-』  
未来開拓大塚プロジェクト事務局, 東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室
- 2002 「海南島リー族のネズミ捕獲弓」『動物考古学』18, 動物考古学研究会
- 2003a 「大きな鼠小さな鼠-焼畑周辺をめぐる小動物狩猟-」『アジア・アフリカ言語研究所』第64号
- 2003b 「野生と栽培を結ぶ開かれた扉-焼畑周辺をめぐる植物利用からみた栽培化に関する一考察-」『国立歴史民俗博物館研究報告』第105集
- 2003c 「トリとネズミ-弾弓と鉄弓からみた焼畑をめぐる小動物との戦い-」『先史学・考古学論究IV』熊本大学考古学研究室創設30周年記念論文集
- 西本 豊弘 1989a 「下郡桑苗遺跡出土の動物遺体」『下郡桑苗遺跡』大分県文化財調査報告書80
- 1989b 「弥生時代のブタ」『季刊考古学』28
- 1990 「弥生時代の家畜-ブタは農耕儀礼とともに渡ってきた-」『日本文化起源論』歴史群像特別編集 学習研究社
- 1991 「弥生時代のブタについて」『国立歴史民俗博物館研究報告』第36集
- 1992a 「下郡桑苗遺跡出土の動物遺体」『下郡桑苗遺跡II』大分県文化財調査報告書89
- 1992b 「朝日遺跡の弥生時代のブタ」『朝日遺跡II』自然遺物編, 愛知県埋蔵文化財センター報告書31
- 1993 「弥生時代のブタの形質について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集
- 西本豊弘・松井章 1999 『考古学と動物学』考古学と自然科学②, 同成社
- 根木修・湯浅卓雄・土肥直樹 1992 「水稻農耕の伝来と共に開始された淡水魚撈」『考古学研究』39-1
- 農林省山林局編 1936 『焼畑及切替畑ニ関スル調査』治水関係資料第九輯, 農林省山林局
- 福井 勝義 1983 「焼畑の普遍性と進化-民俗生態学的視点から-」大林太良編『日本民俗文化体系 5 山民と海人-非平地民の生活と伝承-』小学館
- 安室 知 1998 『水田をめぐる民俗学的研究-日本稲作の展開と構造-』慶友社
- 八幡一郎 1980 「魚伏籠」「魚伏籠後聞」『環太平洋考古学』八幡一郎著作集第5巻
- 黎族簡史編写組 1982 『黎族簡史』広東人民出版社

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

(2003年3月3日受理, 2003年5月9日審査終了)

---

## **Pigs and Boars — A Study on the Use of Domesticated and Wild Animals From the Standpoint of the Li Tribe of Hainan Island —**

NISHITANI, Masaru

There is a strong possibility that pigs were brought to the Japanese archipelago from the continent. However, the Chinese style of intensive agriculture with a singular rotational system that incorporated pigs into agriculture did not, with the exception of the Ryukyu Islands, exist in Japan during the Yayoi period or any later period in Japanese history. History also tells us that the raising of pigs ceased after the Nara period. This paper studies this question by comparing the history of pig farming on Hainan Island with the livelihood systems of the Li tribe that did not pay particular attention to pigs.

It is believed that it wasn't until the Ming period that the Li tribe on Hainan Island began to raise pigs as part of their everyday lives. The reason for this is connected to the increase in demand for pork generated by population pressure on Hainan Island and it may be surmised that the acceptance of pig farming by the Li tribe is attributable to the added value that pigs had as goods that could be exchanged for iron products and salt.

However, the Li tribe did not introduce a method of pig farming that follows the Chinese style of intensive agriculture. Instead, they continued to maintain livelihoods that involved wet rice paddies, slash-and-burn fields, hunting and gathering and domesticated livestock. The distinguishing feature of this style of livelihood was the use of "large traps" that were built in slash-and-burn fields that are part of the natural world, and the way they created a system for the daily trapping of wild animals within their agricultural system. This is vastly different from the Chinese style of intensive agriculture that relied on a man-made rotational system, and is believed to be one factor that made it possible to maintain a way of life that did not pay much attention to pigs.

Not only was the Japanese archipelago, with the exception of the Ryukyu Islands, the same as Hainan Island in that it did not turn to the Chinese style of intensive agriculture, but slash-and-burn fields that had already disappeared from regions where the continental Chinese style of intensive agriculture had been prominent continued to be used after the

---

---

Second World War up until the 1970s. The question of just how far back slash-and-burn fields date in the Japanese archipelago is a topic for future research, and the diverse utilization of nature in slash-and-burn fields is an aspect that deserves attention.